

Title	<Book Review> Claire Colebrook, Deleuze : A Guide for the Perplexed, Continuum, 2006
Author(s)	孔, 彧
Citation	年報人間科学. 34 p.211-p.215
Issue Date	2013-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24970
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈書評〉

Claire Colebrook***Deleuze: A Guide for the Perplexed***

Continuum, 2006

孔 噫

はじめに

本書の著者であるクレア・コールブルックは、現在ペンシルベニア州立大学の英語文学部で教鞭をとっている。専門は現代文学、理論とカルチュラル・スタディーズおよび視覚文化論である。とくにドゥルーズと視覚芸術、映画について関心を持っている。著作からみると、彼女は芸術と文化に限らず、ジェンダー論、倫理学、クイア理論、歴史と法律をはじめ、幅広くさまざまな分野に関心を持っている。彼女は、ドゥルーズの紹介の本を多数書いているが、本書もその一冊である。

本書は、題名にも示されているように、ドゥルーズを読むと難解と思う人々のためのガイドブックである。著者が本書で目指しているのは、個々の概念を解釈することではなく、いかにドゥルーズ（主に後期）の哲学を全体的に捉え、その流れと繋がりを理解すればいいのかについての解明である。そのためのキーワードが、ドゥルーズのひとつの重要な概念である「潜在性 (potential)」である。コールブルックはこの概念を手がかりにして、『シネマ1』と『シネマ2』から出発し、『哲学とは何か』を経由して、『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』における資本主義の解釈へ向かう。潜在性は『シネマ』に留まることなく、貨幣、欲望、資本主義にまで関連している。それゆえ、本書はドゥルーズの歴大な概念とそれらの関係性を理解することに困難を感じた読者向けの本である。この書評では、このような著者の試みに沿って、ドゥルーズの思想の流れを紹介したいと思う。

本書の構成

まずは各章の内容から本書の構成について説明しよう。第一章「シネマ、思考と時間」では、ドゥルーズの『シネマ』二巻が概略的に紹介される。そのなかで注目されるのは機械装置と映画の関係である。また、本書の重要な問題のひとつであるバルクソンの生命論も提示される。第二章「運動イメージ」では、『シネマ1』を中心にパースの記号論が紹介される。また、第一章に引き続き、機械装置におけるシネマの非人間性についての解釈と、生命論の観点からみるイメージの分析も含まれる。第三章「芸術と時間」は、主に『シネマ2』を扱いながら、機械の非人間性という問題がさらに強調され、映画における感覚=運動系の破壊が論じられる。さらに著者は時間と貨幣という観点から資本主義の問題に踏み込んでいく。第四章「芸術と歴史」では、モニュメントとしての芸術の問題、そして資本主義と領土化の問題が導入される。

最後の第五章「政治と意味の起源」では、芸術が政治と歴史に結びつけられ、芸術は哲学的に考えられるべきであると強調される。また、つねに新たなものを生み出す力の根源である発生という観点も提示される。彼女によれば、発生の問題は生命論、芸術、哲学を結びつけながらドゥルーズを読解するときの極めて重要なポイントである。

本書はさまざまな問題を呈示しているが、出発点はシネマである。それゆえこの書評では、主に彼女によるシネマの位置づけおよび彼女がつねに関心を持つ芸術と資本主義の問題を紹介しようと思う。

シネマの位置づけ

クレア・コールブルックは、生命および生命の潜在性は、われわれ人間の知覚がテクノロジーと出会ったときから思考されるものであると主張する。彼女は生命が開かれた全体としてつねに新たなものになり続けていると論じている。それは映画がわれわれに時間に対する新たな見方を与えてからこそ生じることである。その新たな見方とは、映画テクノロジーの時間による生命の差異の可能性である。彼女はドゥルーズを生氣論者と主張する者に対して、以下のように批判する。第一に、ドゥルーズが言う意味での生命は、すでに現前している理性を持った人間のことでないという批判である。起源と発生から人間を見ることによって、われわれは物事の潜在性に目を向けることができ、生についてつねに創造的な視点をもちつづけることができるのである。第二に、われわれの思考の最大の潜在性に至るためには、われわれの思考は予測不可能なものに出会わなければならないという批判である。ドゥルーズはシネマの知覚はもはや人間的な知覚ではなく、機械の知覚であると論じている。われわれは機械の知覚によってから、人間ではない力と出会い、思考を開始するよう強いられる。つまりドゥルーズ哲学にとって、生命について考えることは、人間または主体から出発して生命の知覚を論じることではないのである。

伝統的な叙述によれば、機械も芸術も生命の付属物にすぎない。ゆえにわれわれは、生命を拡張する機械（芸術）を善と見なしているし、また生命を破壊する機械（芸術）を悪と見なしている。このような見方が成り立つためには、生命がひとつの全体としてすでに自己を提示していることを前提としなければならない。しかしドゥルーズは、機械（芸術）が生命に対する付属物とみなされることも、生命がひとつの全体としてすでに出来上がったものであることも認めない。代わりに、彼は現実性に先立つ「関係性(relation)」という言葉を使って、その関係性の潜在性を提示する。そして、この潜在的な関係性を「イメージ」と呼ぶのである。こうすると、生命はまず前もって規定されて存在するのではなく、それに先行する関係性のなかでのみ規定される。ゆえに、潜在的な関係性は生命を構成し、生命そのものが潜在性なのである。生命はこの潜在的な関係性のなかで、他のものとの関係性のなかで、現実化するのである（関係性は生命が成り立つ条件となり、もはや古典的な意味での主体を失なわれていく）。そこからこそ、われわれは生命という概念を理解できるのではないか。このようにドゥルーズは、関係性のなかで潜在性を論じるのである。

この関係性の潜在性は、開放的な全体を要求する。もちろん、この全体の構成は永遠に完成するものではなく、つねに開かれた物であり続ける。こういった関係性と潜在性の中で、イメージに対する知覚の「遅

延 (delay)」によって思考が出現する。この遅延は、全体としてすでにこの世界に慣れている身体が、潜在性とはじめて出会う時に生じる知覚の遅延である。遅延によって、われわれ（とくに脳）は生命維持に必要な関係性によってのみ構成されるイメージから切り離される。つまり、思考を有機的なあるいは現実化されている関係性から切り離し、われわれを今までの身体から離す。それゆえ思考は、われわれを世界に慣れた身体から切り離す新しい何かと結びついている。こうして、テクノロジーを人間的な視点から切り離すことができる。潜在的な関係性は、人間に人間以外のものを提示し、人間に思考を強いるのである。ゆえに、このつねに新たな関係性を生みだしつづける潜在性は、非人間的な (inhuman) 潜在性として考えられるのである。

映画における潜在性はこのようにわれわれに新たな思考回路を与える。また、この新たな思考はシネマだけではなく、文学、科学、政治にも関係する。著者が『シネマ』からドゥルーズの哲学全般に向かうことができるのはこのような理由によってなのである。

シネマから貨幣、資本主義と欲望へ

『シネマ』において、ドゥルーズが主張することは主に以下の三つのことである。第一に、映画は差異を引き起こす能力を持っているという主張である。映画は、映画的な知覚によって、われわれに異なった関係性を与える。第二に、発生の観点から関係性および潜在性を理解しなければならないという主張である。それは、映画はすでに規定された意味の秩序のなかに成り立つのではなく、潜在性に基づいて作用し、新たなシステムを生産するものだからである。第三に、すでに存在する言語秩序のなかで言葉を使う効率的な主体の代わりに、イメージの全体に反応する機械の視点を強調しなければならない、という主張である。この三つの主張から、われわれは映画とは別の領域について考えることができる。

たとえばドゥルーズとガタリは、時は金なりと、主張する。貨幣は、等価的な価値を表示する。また、貨幣による交換には、1) 普遍的な等価基準および一時的な遅延（物々交換のように直接に必要なものを手に入れるのではなく）がつねに要求され、2) 交換価値は商品のなかに存在するのではなく、物と物との関係性のなかでしか成り立たない。言い換えれば、この関係性は、貨幣自身がつねに他のものに依存することでしか現実化できない潜在的なものであると示される、ということである。このとき、労働者の欲望は単純に労働を対価にして良い生活を希求することではなくなる。労働は貨幣を媒介することによって、同一性をもつことができる。貨幣は労働の基準としてわれわれに報酬を払うことを可能にし、また、明日の労働も同じ報酬をもらえることを保証する。これは、資本と時間とのあいだの「債務 (debt)」である。資本は同一性を保証できる借金（ある種の遅延）に依存しているのである。したがって貨幣は、つねにインフレ的な存在である。労働者が労働と引換えに得たものは、つねに貨幣だけである。根源と目的も失っている交換は、単なる貨幣の流れにほかならない。ゆえに、貨幣を前提にする現代資本主義は、生産そのものしか考えることができない。交換の「商品—貨幣—商品」の図式は、「貨幣—商品—貨幣」に変換できるように、資本の流れを意味するにすぎない。

コールブルックによれば、映画における時間と貨幣の問題は芸術と貨幣の問題でもある。映画は、運動

を通じて時間そのものを表現できるが、貨幣が時間の基準になる時、つまり、貨幣＝時間となる場合は、逆に時間が運動の媒介として現れるのである。時間はこのとき貨幣と同じく私有化されることになる。この資本主義的な私有化は、欲望と同じように目的をもたず、そこでは生産と再生産しか考えられない。生命はそのとき、固有な身体、組織、場所から離れていき、別種の流れに変容していく。このときの生命は、もはや関係性のなかでしか「自己」を定義することができなくなり、関係性のなかで絶えず新たなものを創造することしかできなくなる。つまり、貨幣は元来潜在的な時間を均一化して飼いならすものであるのだが、資本もしくは映画に対する投資は、現在においては存在しない何かを欲望する脱領土化 (de-territorialization) を行うと同時に、同一性の要求によってその再領土化を行って、時間の特異性を抹消しつづけようとするのである。

そうであるならば、交換とは、資本主義におけるもっとも基本的で、もっとも原理的なものであることが判明する。ドゥルーズとガタリは、この交換をレヴィ＝ストロースの婚姻理論に重ねる。レヴィ＝ストロースの親族間の婚姻交換は、欲望の即時的実現を我慢させ、延期することで、人間はより高い目的を達成することができるのである——われわれは即時的な欲望を犠牲にすることによって、安定的で有意義な生活を過ごすことができる。また、この欲望の遅延も、未来において、われわれに有効性と効率性を与える（必要以上働くと、余った時間がわれわれにより有効な余暇を与える）。この交換からもたらされる関係は社会に均衡を与え、われわれをカオス的で動物的な世界から予想可能で管理しうる秩序のある世界へと変容させる。過剰な生産も、交換をより効率的に成立させて、またより多くの生産へと導くことを可能にするものなのである。婚姻と親族関係も、社会的な安定を維持するものである。

これに対して、ドゥルーズとガタリは、盗みと贈与、そして非平衡を強調する。このような観点から理解される貨幣は、コード化するものではなく、資本を脱コード化するものである。貨幣は、もはや交換において自己を他の価値に隠すことはなくなり（前資本主義的）、資本そのものを理由または目的として現れるのである。われわれは、この関係性のなかで生命維持をはるかに越えて、自己の暴力的な拡張りまで求めることになる。このときの資本は、前資本主義の時期のように交換を通じた二者間の縁組 (alliance) を意味するのではなく、出自的 (filiative) な父子関係を通じて自己を起源または中心として捉えるのである。前者は空間的な関係性から成立する概念で、後者は起源からの時間的な流れによって成立する概念である。専制君主は過剰な生産を収奪し蓄えることによって、自己の特権的地位を確保し、大地との聖なる出自的な関係を保持する。つまり、まず縁組によってあらゆる連結は中心のないある種の場を創りだす（聖なる大地である「器官なき身体」）。そして、この場（領土 territory）のなかで出自によって特異点（ここは専制君主）が生み出され、脱領土化 (deterritorialize) が行われる。そして、連結点が生産されて、新たな関係性を創造する。ドゥルーズがつねに前人称的な観点から議論を始める理由はここから明らかになる。

おわりに

本書の読み方はひとつには限らないだろう。ここでは潜在性という概念を通じて本書を紹介したが、他にもパースの「一次性」の意味からの解釈、またはカントを通じた空間と時間の説明にそって本書を読む

ルートも可能である。潜在性はドゥルーズ哲学全体において重要な概念であり、著者であるクレア・コールブルックは意識的にその概念を強調し、それに沿って本書を構成しているのである。こう見ると、本書はガイドブックとしての全体性をきちんと保っているといえる。しかし、その対価としてなのか、同じことを繰り返しているという印象も受ける。

また、彼女は映画から出発して本書を構成しようとしているが、全体的な観点から見ると、本書の焦点はやはり散漫であるように見える。とくに後半のドゥルーズ＝ガタリに関連する論述と、本書の主旨である生命論あるいは芸術哲学との関係は十分では論じではおらず、やや唐突に挿入された印象がある。コールブルックによる個別の概念についての解説は明瞭的で読者の理解を助けることができると思われるが、唐突に話題を飛んでしまうとやはり読者を迷わせることになってしまうかもしれない。これらについての精緻な議論を見るために、われわれは、コールブルックの他の著作に取り組むべきだろう。